

## 「夜間中学における教育活動充実に関すること」

### 調査の目的・問題意識

#### 1. 目的

- ①外国籍生徒の学習活動に有効なICT等の教材・教具を活用した効果的な教育指導について研究する。
- ②SC等の外部人材等を活用した、より効果的な教育相談及び教育活動について研究する。
- ③日本語学級のない本校において、効果的な日本語指導を行い、各教科における学力の向上と授業力の向上について研究する。

#### 2. 問題認識

外国籍の生徒一人一人の日本語力の差は顕著であり、出身国ごとに「既習の学習項目」と「身に付いた文化及び価値観」も異なる。そのため、授業展開には細かい配慮が必要である。また、ここ数年で増加傾向にあるのが日本人の学び直し生徒である。学齢段階で不登校であった方々が、その要因であった状態や環境が今もなお改善されないまま入学してくる場合が多い。そのため、夜間学級入学後に再度、不登校になったり、学校での人間関係に苦勞する生徒が一定の割合で存在する。

### 創出した先進事例 ICT

#### 1. 実施に向けて検討した方策

- ・まなびポケットの活用

#### 2. 検討した方策の分析

- ・多様な学習者に合わせた授業スタイルの推進

#### 3. 実際に行った方策

- ・授業で使用したスライドをアップロードし、授業後にもう一度スライドを確認して振り返る。
- ・次回の授業前に様々な学習コンテンツの活用

#### 4. 生じた成果・効果

- ・授業中は個人端末のスライドに気をとられず、聞くことや考えることに集中することができた。また自分の言語への翻訳や文字の大きさなども自在に変えることができるため、授業内容の理解が深まった。
- ・事前に自宅で取り組める学習コンテンツを提示し、授業に臨むことができ自信をもって授業に参加できるようになった。

#### 5. 課題

- ・端末操作への不安
- ・学習履歴の蓄積課題

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

#### 1. 「ICT支援員」との協同

- ・年齢が比較的若い学習者はICT端末への抵抗感が少ないが、高齢の学習者には操作の時点での不安が多いため、ICT支援員の方との連携を目指し丁寧な指導を目指す。また、教材だけでなく学習者の学修履歴を蓄積することで今後の学習指導に活用できる事例の創出に取り組む。

## 創出した先進事例 ICTと日本語指導

### 1. 実施に向けて検討した方策

- ・多国籍の生徒一人一人の日本語力の差が顕著である。
- ・出身国ごとに「既習の学習項目」と「身に付いた文化及び価値観」も異なる。

### 2. 検討した方策の分析

- ・日本語力の差を配慮した個別学習が必要
- ・イラストを活用した授業

### 3. 実際に行った方策

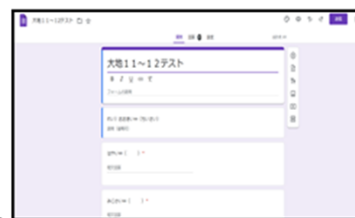
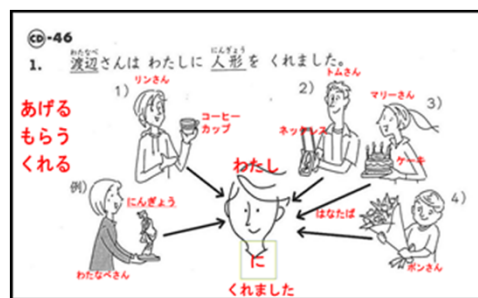
- ・テキストのイラストを使用したスライドによる授業
- ・フォームスを活用したドリル学習の実施

### 4. 生じた成果・効果

- ・イラストから単語の意味や使う場面などを理解することが出来た。
- ・個別の課題を繰り返し練習することで基礎的な問題を解くことが出来た。

### 5. 課題

- ・生徒が自分で考え文章を作る事があまり出来なかった。
- ・繰り返し解いた問題は出来るようになったが、応用問題はあまり出来なかった。



## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

### 1. 「学び」の支援／「ICT」の活用 など

- ・基礎の定着にはつながったが、応用問題を解いていく練習をする必要がある。
- ・基礎問題の解答はICTを活用し、応用問題の解答は教員が確認していく必要がある。

## 創出した先進事例 国語科

### 1. 実施に向けて検討した方策

「国語」の授業で「日本語」学習を

夜間学級に入学してくる外国籍生徒の場合、日本語学級の有無に限らず、いわゆる9教科の学習をするクラスにするか、まず「日本語」から勉強を始めるクラスにするかという線引きは、日常会話ができるか否かである場合が多い。つまり、会話がある程度通じれば通常学級、そうでなければ「日本語」を中心に学習するクラスからスタートすることになる。

このとき学習する「日本語」は、日本で生活する上で（あるいは授業を行う上で）円滑にコミュニケーションをとることができるように、一般的な社会生活で使う言葉や文章であり、会話文が中心となる。夜間学級の場合、その「日本語」を1年ないし1年半学習した後、9教科の学習クラスに編入することになるのが一般的だが、そこで課題になるのが「国語」の授業だ。

### 2. 検討した方策の分析

いわゆる「国語」は、私たち日本で生まれ育った人を、その発達段階に応じて指導するよう想定されているし、「国語」の教科書もそのように編纂されている。つまり「国語」の勉強とは、教養的・人格形成的な意味合いが強く、小説や詩歌、古文に漢文といった日本人としての素養が多く含まれ、「読み書き聞き話す」という「日本語」の技術がある程度身につけているのが大前提なのだ。つまり、言葉や文が読めること・理解できることを前提に、様々な日本語の文章に触れて、表現や内容について学習していくことを通して、人として成長してもらうことが「国語」のねらいだ。この「国語」を「日本語」の学習を終えたばかりの生徒や、長年日本に住み生活し、耳から覚えた「聞き話す」「日本語」しか獲得できていない、外国籍生徒にとって、「国語」の学習は大きな壁となっている。つまり、ほとんどの生徒が「国語」の教科書を直ちには使えないということになる。

### 3. 実際に行った方策

そこで、「日本語」の文法や敬語などのTPOに応じた言葉遣いを初歩から学習し、積み上げていくことが、「国語」学習への近道となるのではと考えた。そのために使用した教材が『短期集中 初級日本語文法総まとめポイント20（友松悦子・和栗雅子著：スリーエーネットワーク）』である。それを中心に「日本語」を学習し、その成果を客観的な日本語の力を測る一つの方策として『JLPT日本語能力試験公式問題集（にほんごの凡人社）』のN4・N3レベルを使用した。

### 4. 生じた成果・効果

その結果、一つの尺度ではあるが、自分の客観的な日本語レベルを自覚でき、ある一定の目標をもって自ら学ぼうという姿勢が生徒たちに生まれた。中には自費でJLPT日本語能力試験を受験しN3に合格した者もいる。

また、長年日本に暮らし、日本語で意思疎通をとることに問題はない生徒も、今までの自分の誤りに気付き、TPOに応じた会話（敬語等）を身に着けようと努力する姿が見られた。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

1. 今後は、上記学習の他に小学校・中学校の教科書から、成人でも使える文章を抜粋、編纂して教材を作成、活用して「日本語」初級レベルを脱する「日本語」力を身に着けさせていきたい。当面、より豊かな日本語表現を身に着けるために、オノマトペや副詞的用法、故事成語やことわざ、四字熟語などの学習も取り入れていきたい。

令和7年2月28日

【調査研究事項番号 IV】 川崎市立西中原中学校

## 研究テーマ「生徒一人一人の状況に応じた学習指導の充実について」

### 調査の目的・問題意識

#### 【目的】

川崎市立西中原中学校夜間学級は、外国につながるのある者や既卒者による入学希望者が年々増加している。今後は入学希望者のニーズも一層多様化することが予測されることから、入学希望者が求める学びについて十分に確認し、必要な支援や多様な教育機会を提供することができるような工夫が必要である。そのため、入学前の見学や体験入学など夜間学級と教育委員会が連携して進めることが重要であり、その在り方について研究を進めていきたい。また、夜間学級に通学している生徒は、日本だけでなくフィリピン、中国、インド、ネパール、ベトナム等の多様な国籍を持つ生徒が在籍の多くを占めるほか、10代から60代の幅広い年齢層の生徒が在籍している。そのため、国語や算数・数学等の基礎的・基本的な学習内容の相違が大きく、日本語を含め、生徒の個々に応じた指導が必要である。生徒の状況に合わせた教材の在り方について研究し、生徒の資質・能力の育成を図りたい。

#### 【問題意識】

夜間学級の入学希望者は、既卒者や外国につながるのある者など、様々な学びのニーズを持った者が年々増加する傾向にある。そのため、個々の学習のニーズを適切に把握し、それぞれの学びに応じたきめ細かな対応をしていく必要がある。

そこで、次のことを踏まえて研究を進める。

- 1 入学希望者に対し、夜間学級のねらいや入学後の学習について十分理解できるように、入学前の見学や体験入学における対応を丁寧に行うこと。
- 2 入学希望者について、教育委員会と西中原中学校夜間学級との緊密な情報共有を図ること。
- 3 教育委員会の事前相談や面談で学習状況の聴き取り、西中原中学校夜間学級における入学前見学や体験入学における希望者の状況把握などの情報共有を図ること。
- 4 体験入学で、入学希望者の学習の状況を把握し、個々に応じた入学後のカリキュラム編成等について検討すること。

## 実践事例

### 【実施に向けて検討した方策】

入学前見学や体験入学における聞き取り調査を行い、一人一人の学習ニーズを適切に把握し、学習指導の充実につなげる。

### 【検討した方策の分析】

入学前に聞き取りをきめ細かに行うことで、学習の段階を把握することができる。特に既卒者であっても、中学卒業の日本人や外国籍の高校・大学卒業者とでは学習の段階が違うこともある。特に外国籍の入学希望者については、日本語を学びたいと考えている希望者も多いため、日本語の取得状況によっては学習段階の調整が必要となる。そのことから、入学希望者とは体験入学や面談を実施することで、日本語の取得状況を把握することができ、入学後に「何を」「どこから」学習することが必要なのかを適切に把握することができる。そのようにすることで、国語以外の学習についてもどのように学習を進めれば良いかや教材の研究や工夫にもつながる。

### 【実際に行った方策】

入学前の面談を実施する際、「話す」ことと「書く」こと、また、「聞くこと（聞き取り）」の確認を行った。

日本語の習得状況が十分でない生徒に対して、日本語能力の向上を図るために、どのような指導が適切であるかについて夜間学級と教育委員会が連携し、夜間学級の教職員を対象に教育委員会教育政策室の人権・多文化共生教育担当指導主事などが講師として、日本語指導研修を定期的に実施し、日本語教育への理解を深め指導の向上を図った。

生徒の教材については、日本語指導研修講師や指導主事等が授業参観に参加したり、指導事例検討会を実施したりしながら個々の学習に応じた教材の検討・協議を行った。生徒の資質・能力の育成や学習の定着を目指し、教材(購入教材)を使用し、またそれを基に自主教材を作成した。

### 【生じた成果・効果】

成果・効果としては、入学前に生徒の状況を的確に把握することで、学習段階に応じてグループ別で学習を展開することができ、学習効率に大きく役立った。特に、外国籍であっても日本語の理解が進んでいる場合は、1年生からではなく、2年生や3年生からの入学を検討することができる。学習状況に合わせた授業を展開することで、学習効果を上げることができた。

さまざまな国につながるのある生徒が、現在生活している日本の文化を理解するために、講師を招聘しての書道教室、陶芸教室、教科と関連させてもちつき大会等を行い、伝統文化や日本の年中行事に触れる機会を設けた。また、文化祭等で自分の国を紹介する場面を設け、様々な国の文化を知り理解をすることで、多文化共生への理解を深めることができた。

【課題】

課題としては、学習状況に合わせてグループ別で学習を進めることで初めは学習の理解が同じでも、学習を進めることで徐々に学習への理解に差が生まれることである。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

入学希望者への支援／効果的な面談の活用

入学を希望する者について、今後も生徒一人一人の状況を的確に把握することやきめ細かな面談を実施し、入学者のニーズに沿った学習支援ができるように努めていき、多様な生徒の状況に応じた学習内容や学習形態についての学習指導が充実するよう検討していきたい。



## よりよい学校生活を送るための効果的な学校行事や校外学習等の在り方について

### 調査の目的・問題意識

#### 1. 目的

- ・学校行事や校外学習に参加することによって、自尊感情を回復させ、相互理解をの向上させる。

#### 2. 問題認識

- ・言語や文化の違いなどで、日本語によるコミュニケーション不足に陥り、学校生活に馴染むことができない生徒がいる。
- ・日本語の読み書きができず社会生活において困難が生じる生徒や、人間関係において馴染めず、自尊感情が低い生徒がいる。

### 創出した先進事例

#### 1. 実施に向けて検討した方策

- ・生徒が発表する場及び自校および他校の生徒と交流する場を設ける。
- ・日々の学習を深めたり日本の文化に慣れ親しんだりできる場を設ける。
- ・各行事への参加率を向上させるために周知方法を検討する。

#### 2. 検討した方策の分析

- ・各行事後に実施したアンケート及び感想、話し合い活動の内容。
- ・各行事の参加率。

#### 3. 実際に行った方策

- ・学校行事等で生徒が発表する場及び自校および他校の多くの生徒の交流する場を設ける。
- ・校外学習で日ごろの学習を深めたり日本の文化に慣れ親しんだりできる体験学習を取り入れる。
- ・各行事への参加率を向上させるため、事前授業及び行事案内掲示、行事の説明、予行練習等の周知方法を用いた。
- ・生徒が校外行事等の学校行事で安心して参加できる環境づくりのため、生徒の参加費用の軽減及び体力的な負担軽減等の支援を行った。

#### 4. 生じた成果・効果

- ・学校行事等で生徒が発表する場を設け、生徒が自己表現することで自尊感情を回復させ、近畿夜間中学校協議会の三大大行事では、自校および他校の多くの生徒と交流を行い、他者と共通する部分や異なった部分を知り、「多文化共生」、「相互理解」を学ぶことによって、学校生活に充実感を得ることができた。

## よりよい学校生活を送るための効果的な学校行事や校外学習等の在り方について

- ・校外学習では体験活動に取り組むことで、日々の学習を深め、日本の文化に慣れ親しむことや、学齢期に十分学べなかった生徒や外国籍の生徒たちの学習意欲向上につながったと考える。

### 5. 課題

各行事に参加していない生徒に対して、

- ・「自尊感情」を向上させる場及び「多文化共生」、「相互理解」できる場を作り出すこと。
- ・生徒に参加を促す周知方法。

※生徒が行事に参加していない理由としては、仕事や子育てで忙しいことや、費用が発生すること、持病があり遠出ができないこと等がある。その他、学校を欠席しており行事自体を認識していないことや、学校行事に対しての参加意識が低いことが考えられる。

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

#### 1. 「各行事に参加していない生徒に対して」の支援

- ・参加を促す周知方法として、入学時に学校行事の紹介を行う。また、説明会に参加していない生徒に対して、後日案内の説明や電話連絡をする。
- ・学級活動の時間を活用して、他者の前で自分自身のことを発表する活動や他者の発表を聞く活動を設定。

#### 2. 「各行事への費用に関して」の支援

- ・活動内容については、費用のかからないものを検討する。
- ・移動手段について、貸切バスを使用する行事を厳選する。



## 【Ⅳ. その他夜間中学における教育活動充実に関すること】

天理市立北中学校夜間学級

### 「大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方」

#### 成果報告書

##### 調査の目的・問題意識

###### ◆目的

- 天理市立北中学校夜間学級には多様な背景を持つ生徒が集まっていることから、生徒の多様性に配慮した上で、社会見学や体験学習を通して、大人の生徒が効果的に日本社会事情を理解することを目指す。
- 生徒の経済的負担、多様な違いを持つ生徒どうしの理解・共感・結びつきを深めること、識字日本語学習をしている生徒の言語習得状況等を考慮した校外学習の在り方、現地で学んだことと生徒個々の生活とのつながりを発信する校外学習の在り方、等について研究し、その成果と課題を分析する。

###### ◆問題意識

- 天理市立北中学校夜間学級には 2024 年 2 月 1 日現在 45 名の生徒が在籍している。戦争や差別、貧困・病弱・障害などで学齢期に教育を受ける機会を十分に保障されなかった人たちが、結婚などで主にアジア・南米から渡日した定住型の外国籍の人たちなどが学んでいる。また、2015 年 7 月に入学希望既卒者が夜間中学への入学を希望した場合の考え方が示されるとともに、2016 年 12 月に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」(以下、「教育機会確保法」)が施行されたことで、入学希望既卒者への門戸が一層開かれた。本学級にも若干名ではあるが、家庭事情やいじめ等で学齢期に不登校になりそのまま中学校を形式的に卒業した人が、学び直しのために入学している。今後、本校でも他の夜間中学と同様、従来の層の生徒に代わって、こうした学び直しを希望する人たちの入学希望が増加していくと思われる。
- 新渡日の外国籍生徒の場合、その背景として持っている文化、母語、価値観は、非常に多様であり、日本事情の理解のための社会見学や体験学習の実施も求められている。さらに、日本語使用に関する学習カリキュラムについては、まず、自分の身の回りの社会にアクセスできるようになるための生活言語の習得から始まり、その後に各教科学習に進むための基礎的な学習言語の習得へと進めるといった、順序立てた教育課程が必要になる。
- 学び直しを目的としている生徒の場合、置かれてきた家庭環境・経済環境、十分に学校へ通うことができなかった原因・理由が生徒によって異なっている。そのため、それぞれの生徒の過去の人生経験へ十分に配慮しながら、社会見学や体験学習の実施、将来の生き方を見据えた進路指導と教育相談が必要であり、学習目的の明確化、カリキュラムの工夫、個々の習熟度や学習方法など個々の生徒の特性に応じた対応が必要である。
- 生徒の持っているこれらの多様な側面、それに基づく多様な学習ニーズに応える効果的な教育課程を編成していくためには、職員全体が夜間中学の教員としてのスキルアップを図り、学習シラバスとカリキュラムの改善に取り組んでいかなければならない。
- 生徒の学校生活に目を向けると、お互いの意思疎通や共感・理解について、背景・文化・価値観・母語の違いによって生じる課題が見られる。この問題の解決のためには、生徒どうしが積極的に関わりを持ち、互いの違いとその背景を十分に認識しつつ、ともに学ぶ仲間として結びついていけるような仕組みを教育課程の中で工夫することも大切なことである。
- これらの問題意識・課題を解決する方法として、校外学習の実施を用いることとした。
- 生徒のアイデンティティーやセルフエスティームにもいい影響を与えるため、生徒の生活と結びつき、生徒個々が発信することにつながる校外学習を目指すこととした。

## 創出した先進事例

### ◆実施に向けて検討した方策

- ①大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方についての検討  
→教職員による検討会議を持ち、学校外で具体的事物に触れて学習する目的・意義を確認する。
- ②大人の生徒がこれらの目的・意義を達成するための課題の検討  
→生徒の学習・生活状況について担当教員から報告を受け、生徒の背景と課題を教職員で共有する。
- ③生徒の背景と課題を考慮した計画についての検討  
→教職員による検討会議を持ち、必要な配慮について確認する。

### ◆検討した方策の分析

- ①大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方についての検討  
→日本の自然・天候・歴史を総合的に学習する訪問先を選定することにより、大人としての見聞・経験を深め、集団行動を身につけ、地域で積極的に参画できるための経験を積むことにつながり、同時に、日本社会事情の理解を深めることになると分析した。
- ②大人の生徒がこれらの目的・意義を達成するための課題の検討  
→学習歴や学齢期に教育を受ける機会を十分に保障されなかった理由、生活・経済状況や就職の有無、来日理由、母語・第1言語と識字・日本語の能力、その他、宗教・思想・食事制限・アレルギー等の配慮を要する事柄、等の生徒の背景と課題を共有することで、事前事後の学習、現地での学習をスムーズに効果的に支援することができると分析した。
- ③生徒の背景と課題を考慮した計画についての検討  
→本学級の生徒は多様な背景をもつため、日本社会事情を理解することのできる社会見学(訪問先)や体験学習となるよう工夫する必要があると分析した。

### ◆実際に行った方策

■計画の策定 ☐ 経済的負担の考慮 ☐ 大人の生活とつながり ☐ 仕事があっても参加が可能となるよう日程を早期に伝達 ☐ 多文化共生の状況が実感できるような工夫 ☐ 生徒相互の理解促進と交流を深める工夫 ☐ 交流を含めたグループ活動 ☐ 食事制限があることを相互理解と配慮 ☐ 言語習得状況など識字・日本語学習者への支援 ☐ 多言語による学習補助や通訳補助 ☐ 訪問先での事物と大人の社会生活との結びつきがわかる工夫 ☐ 職業などの進路につながる工夫 ☐ 訪問先での学習を促すための簡易なワークシートの作成と使用 ☐ 事後の学習とつなげるための感想文の集約 ☐ バス会社の相見積りと予約 ☐ 訪問先の選定(鳴門の渦潮・阿波おどり会館・こんぴらさん・中野うどん学校)

■目的の策定 ☐ 乗船体験を通して、渦潮が発生する仕組みを知り、渦潮を間近で体感する。 ☐ 日本三大盆踊りの一つ「阿波おどり」を体験し、日本文化に親しむ。 ☐ うどん打ち体験を通して、日本の粉食文化を学ぶ。 ☐ 生徒相互の交流を図る。

■具体的方策 ☐ 校内研修の実施による生徒背景の理解 ☐ 日程の早期伝達(生徒へのシフト調整依頼) ☐ 校外学習の意義・目的・訪問先の多言語での説明(非常勤講師等の協力) ☐ 検討会議(全2回)の実施 ☐ 下見と関連研究の実施 ☐ 減免措置手続き ☐ 行程と運営・役割分担の確認 ☐ 多言語対応の確認(多言語パンフレット・多言語音声ガイダンス) ☐ 食事制限への対応確認 ☐ 事前学習(全2回)の実施 ☐ Google アースや地図アプリを利用した訪問先・行程の確認 ☐ 地理の把握 ☐ 訪問先のホームページの閲覧と説明 ☐ 校外学習の学習目的・学習ポイントの解説(塩業や小麦栽培に関わる自然・天候・歴史・文化、地域における多文化共生など) ☐ 翻訳機とGoogle Chrome を活用した多言語(5カ国語)でのサポート ☐ 食事の事前注文(ヒンドゥー教やイスラム教の禁忌、アレルギーや思想などの食事制限に対応) ☐ 食事代金への補助(経済的負担減のため) ☐ 校外学習参加費用への補助(経済的負担減のため) ☐ ワークシートの作成と使用(バス車中での学習および事後学習に使用。) ☐ 感想文の集約 ☐ 作文指導

## ◆生じた成果・効果

- 鳴門の渦潮を訪れ、乗船体験を通して、干満の差について体感できた。太陽と月が潮の満ち引きに関わっていることが実感できた。
- 阿波おどり会館で、阿波おどりを鑑賞するとともに体験することができ、盆踊りという日本文化に親しむことができた。
- こんぴらさん(金刀比羅宮)の散策で、島から山に至った自然の移り変わりや、旅行が禁じられていた中で参拝だけは許されていた江戸時代の庶民生活、海上守護等の信仰と代参の流行等、日本の歴史について実感する機会となった。
- うどん打ち体験を通して、生徒相互の交流とすることができた。同時に、小麦粉・水・塩だけで作られるうどんへの理解が深まり、日本の粉食文化についても理解が深まった。また、生徒それぞれのふるさとの粉食文化についても共有することができた。
- 2日間食事を共にすることにより、多様な食事制限があることへの理解が深まった。
- 名物の骨付鶏を夕食で提供したことから、中国人生徒が中国で長命鶏を育てた経験や親鳥肉の味を語る等、生徒の生活を掘り起こす機会となり、全体で共有できた。大人である生徒の生活に対するセルフエスティームの伸長につながられた。
- 一泊校外学習で学んだうどんや粉食文化から、生徒それぞれのふるさとの粉食文化について発信する取り組みにつながられた。その結果、生徒が文化祭で水餃子づくりのワークショップを指導したり、集会で粉食文化に関する発表をしたりすることにつながられた。
- 一泊校外学習の結果、生徒が自己をふりかえり、作文を綴り発信するアウトプットの学習につながり、セルフエスティームを高める機会とできた。
- こうした生徒のようすが、周りの生徒のセルフエスティームを高める学習へもいい影響をおよぼすことになった。多様な背景を持つ生徒どうしの交流が深まり、生徒の学校生活にもいい影響が出ている。

## ◆課題

- 今回、仕事があっても参加が可能となるよう日程を早期に伝達していたが、参加者数増につながりにくく、外国人生徒が仕事を休みにくい状況にあることも顕著となった。参加しやすい校外学習となるよう、さらに日程の設定も工夫する必要がある。

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

- 校外学習を受けて綴られた生徒の作文において、学齢期に校外学習の機会が持てず、実際に自分の目で見、体で感じられる校外学習を夜間中学で初めて経験し、驚くことばかりだという記述がある。この生徒はさらに、字を知っていたら、若い時にもっと色々な所へ出かけて、自然のすごさを体感できていたかもしれないと綴っている。社会についての理解が深まらないまま現在に至っていることを惜しんでいることがうかがえる。様々な理由で学ぶ機会を逸している大人である夜間中学の生徒にとって、現在夜間中学で行っている校外学習での学びは大きな学習機会・学習経験であることは明らかである。引き続き、大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方について改善を図りながら、今後も夜間中学における校外学習を充実させて実施していきたい。
- 校外学習で学んだことやそのことから自身の生活等を掘り起こして作文に綴ることは、セルフエスティームの伸長や様々な学習への波及効果も高いため、引き続き取り組む。また、文化祭等での発表や展示の作成等、引き続き多文化共生を意識した生徒からの発信につなげられる校外学習、夜間中学における教育活動とリンクする校外学習としていきたい。
- 大人の生徒が効果的に日本社会事情を理解する社会見学や体験学習となるよう、大人としての見聞・経験を深める具体的な訪問先の選定、生徒の経済的負担、多様な違いを持つ生徒どうしの理解・共感・結びつきを深める工夫、識字・日本語学習者の言語習得状況等への考慮と支援などについて、引き続き検討していきたい。

## 【調査研究事項Ⅳ】

### その他夜間中学における教育活動充実に関すること

#### 奈良県橿原市教育委員会

①生徒のもつ課題を学校組織で捉え、スクールカウンセラー（SC）、スクールソーシャルワーカー（SSW）も兼務可能な人材との協働によりすべての生徒の学習保障のための持続可能な取組の構築

②生活が困窮している生徒の経済的な負担を軽減することで、校外学習への参加を促し、「学び」の一環として生徒自身が個々の特性や能力に応じて、市民と協働しながら校外学習の企画を主体的におこなう仕組みの構築。

### 研究テーマ①について

#### 調査研究テーマ設定の背景と目的

##### 背景

- 1 生徒の実態として、高齢者の一人暮らし、外国ルーツで日本語が分からない（特に子育てをする上で）不登校を経験したことがある、経済的に不安定という状況にほとんどの生徒が置かれていて、そのうち半数の生徒が上記の複数の項目にあてはまる。
- 2 学校の実態として、生徒に対する支援等について各担当者に任せられ、その担当者によって対応が異なり、学校組織として適切な教育相談が積極的に取り組めていない。
- 3 昨年度、SCを配置し全教職員で教育相談の意義等共通理解を図ってきたが、毎年職員の入れ替わりがあることから、さらに今後上記1に記述した生徒の増加が予想される中夜間中学としての教育相談の在り方を確立していく必要がある。

##### 今年度の取り組みとそのねらい

- 1 適切な教育相談を行い、生徒が主体的に学習に取り組めるようにする。
- 2 生徒（特に学齢期の子どもをもつ生徒）の居住地の小・中学校との連携を図り、生徒理解を深め教育環境の整備を行う。
- 3 上記1、2を実施するに当たって、学校組織を整え、SC(SSW兼務)との協働を進める。

##### 期待される成果

- 1 生徒が安心して学習に取り組むことができる。
- 2 教員が適切な生徒理解のもと、生徒対応ができる。
- 3 夜間中学と外部関係機関との協働が進む。

## 創出した取り組み事例及び成果

### 1 事業A : 心身に不安をもつ生徒への教育相談

#### ① 教育相談部を立ち上げ、コーディネーターの決定（4月）：

- \* 教育相談について全教職員による共通理解
- \* 全生徒のアセスメントシートの作成

#### ② SC（SSW兼務）による教育相談（7月～2月）

- \* コーディネーター（担当教員）による相談前の確認後、カウンセリングを実施
- \* カウンセリング後のフィードバック 〈SC→ 担当教員・コーディネータ〉
- \* 全教職員での相談内容の共有 〈担当教員→ 全教職員〉
  - ・ 対象生徒とのカウンセリングができないときには、担当教員がSCと相談。
  - ・ 必要な場合、外部機関（医療・福祉・行政）との相談・ケース会議を進める。

#### ③ 教員研修

- \* 上記SCによる教育相談の内容の共有
- \* SCを講師に「高齢者・外国ルーツの人・不登校経験者理解」をテーマにした研修

#### ☆ 成果

- \* 対象生徒の登校日数が増え、学習への主体的な姿勢が見られた。
- \* 教育相談部会を開催し取組の検討確認を行い、教育相談の組織化が進んだ。
- \* 生徒・教員のSCによる教育相談の認識が高まった。

### 2 事業B : 生徒（特に学齢期の子どもをもつ生徒）の居住地の小中学校との連携

#### ① 生徒の居住地教育委員会訪問（7月下旬～8月） 〈全教員〉

- \* 学齢期をもつ生徒について説明し、その子どもが通う学校との連携について依頼

#### ② 畝傍中学校・畝傍北小学校のSCとの連携 〈コーディネーター〉

- \* 生徒とその子どもについて情報交流を月1～2回実施。
- \* 両校SCによる当該の子どもの見守り

#### ③ 他の生徒の居住地の小学校との情報交流

#### ☆ 成果

- \* 教員に学齢期の子どもをもつ生徒への理解が深まった。
- \* 生徒の居住地の学校との協働のための関係づくりが進んだ。

## 調査研究を踏まえた今後の課題

① 夜間中学が、学齢期に不登校を経験した生徒の学習を保障し、セーフティネットの役割を果たしていくためには、SC・SSWからの専門的なアドバイスは必須で、夜間中学の教職員にもある一定の知識や対応能力が必要であり、生徒の適切な社会生活を可能にしていくためには、チーム学校として外部の関係機関と協働を進めていく必要がある。

② 夜間中学の生徒はそのほとんどが成人であることから、教職員が成人の心理について理解し学齢期の学習とは異なる成人教育の在り方を構築していく必要がある。

③ 外国ルーツの家庭が増えてくる中その暮らしを支えるためにも、日本語学習を求めて夜間中学にくる親とその子が通う学校や居住地の教育委員会との連携が必要である。

# 研究テーマ②について

## 調査研究テーマ設定の背景と目的

### 背景

- 1 経済的困難や物価高騰により、生徒の学校行事への参加が制限される状況が続いている。
- 2 市民の手による夜間中学設立の趣旨と志を引き継ぎ「学ぶ人を中心においた夜間中学」を維持するためには、地域市民との交流を促進し、学校を地域に開かれた場とすることが求められている。
- 3 昨年度の校外学習では、市民団体「檀原に夜間中学をつくり育てる会」（以下 育てる会）との協働を通じ、生徒の参加を促進し、地域とのつながりを深める成果が得られた。

### 今年度の取り組みとそのねらい

- 1 生徒の主体的・協働的な学びを促進し、校外学習の企画・運営を生徒自身が行う仕組みの工夫。
- 2 生徒会役員が中心となり、市民団体と協働しながら、以下の活動を実施。

#### @夏の校外学習

- \* 生徒の経済的負担を軽減し、参加者増加を目指す
- \* 交通手段の確保・施設予約・参加呼びかけ・活動企画・事後評価 など
- \* ICT活用を含め、生徒が個々の特性やスキルを発揮しながら課題を解決

#### @冬の校外学習（近畿夜間中学連合作品展への参加）

- \* 生徒の経済的負担を軽減し、参加者増加を目指す
- \* 展示企画・工程企画など

### 期待される成果

- 1 生徒の主体性の向上（学校の活動に自ら参加する意欲）
- 2 生徒の社会とのつながりの強化（地域市民との協働を通じた相互理解）
- 3 自己達成感・自己肯定感の向上（学びの場を自ら創り上げる経験）



## 創出した取り組み事例及び成果

### 1 夏の校外学習（2024年8月4日）

#### @ 実施内容事前準備（7月）：

- \* 生徒会役員と市民団体が協働し、交通手段の確保・施設予約等を実施
- \* ICTスキルや日本語スキルを活かした参加表作成、参加呼びかけを実施

#### @当日：

- \* 自然体験学習（バーベキュー調理・スイカ割り・川遊び）を市民と協力して実施

#### @振り返り（9月）

- \* 生徒会・職員会議で成果と改善点を検討

#### ☆ 成果

- \* 生徒の経済的負担を軽減し、参加者増加（9名→17名）
- \* 生徒と市民の交流促進（特に外国籍の新入生との対話が活発化）
- \* 生徒の主体性向上（生徒会が企画・運営に積極的に関与）
- \* 市民団体との協働が深化（準備・運営を共同で実施）

### 2 冬の校外学習（2025年2月9日）

#### @ 実施内容事前準備（7月～1月）：

- \* 展示作品の作成、展示レイアウト、当日の行程の検討
- \* ICTスキルや日本語スキルを活かした参加表作成、参加呼びかけを実施

#### @当日：

- \* 作品展示・交流（他校の夜間中学生との作品鑑賞）
- \* 生徒集会参加（経験共有、意見交換）
- \* 大阪くらしの今昔館見学（生徒発案で追加）

#### @振り返り（2月）：

- \* 生徒会役員が校内報告会を企画・実施。

#### ☆成果

- \* 成果経済的負担軽減による参加者増加（申込19名、当日参加14名）
- \* 生徒同士のつながり強化（作品を通じた共感、経験の共有）
- \* 生徒の主体的な学びの実践（企画・運営・発表まで生徒が主導）
- \* 歴史・文化への関心向上（自主的な見学企画と意欲的な学習姿勢）

## 調査研究を踏まえた今後の課題

@市民の手による夜間中学設立運動の志と夜間中学生の社会的意義に沿った学校運営の中で、生徒が主体的な学び続けることができる環境整備が重要

@地域社会との連携を強化し、生徒の社会参加をさらに促進

@生徒の自己肯定感と学習意欲を高める仕組みの継続的な構築が必要

@地域との協働を深め、生徒が社会とつながりながら学ぶ環境をさらに充実させていくこと